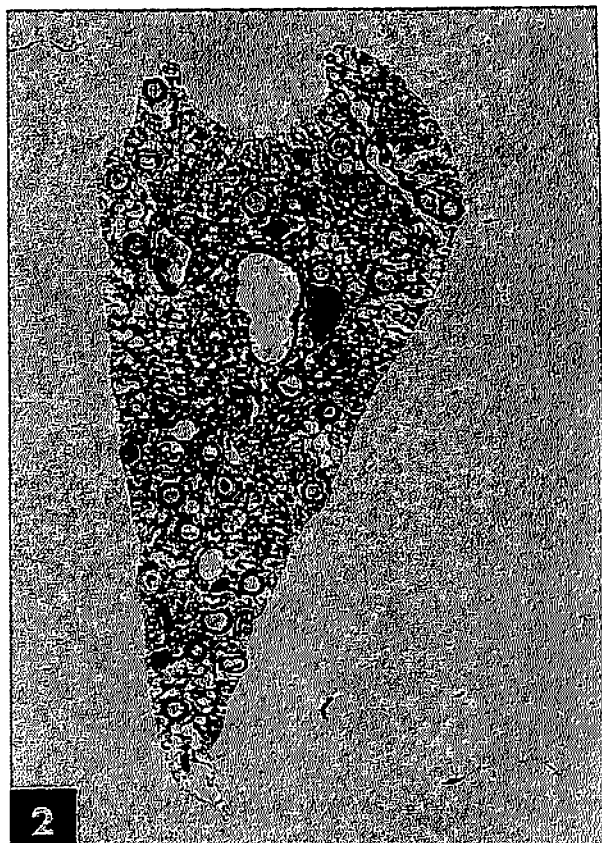
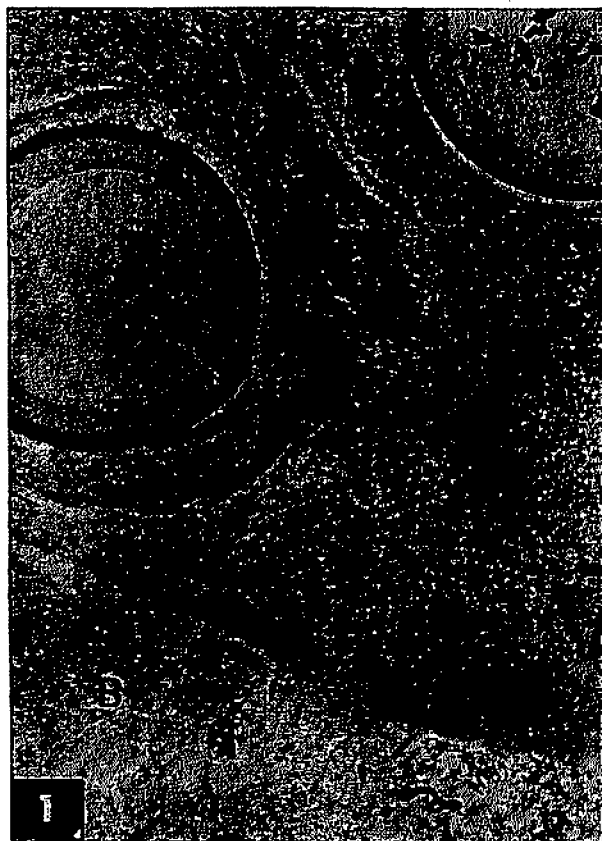


ナキウサギの肺

帯広畜産大学家畜病理学教室出題・第14回獣医病理学研修会標本 No.209



標本：肺。固定：ホルマリン。染色：H-E。動物：エゾナキウサギ (*Ochotona hyperborea yesoensis* Kishida)。性：雄。年齢：不明(成獣)。棲息地：北海道河東郡然別。材料採取年月日：1972年9月8日。

臨床的事項：1972年7月15日、東大雪山系の同一岩場において4匹のナキウサギを捕獲し、帯広動物園で飼育中1例は9月5日頃より下痢、元気喪失し9月7日に斃死した(提出標本の材料)。その後他の3匹も10月19日、25日、26日と相次いで斃死した。

肉眼的所見：一般に死後変化が強かったが、病変は胸腔内臓器に限られていた。すなわち、右肺前半は肺炎(標本A)とともに胸壁胸膜および心嚢と癒着し、この肺炎巣部を含め全肺に亘って帽針頭大の灰白色球状結節が密発していた(B標本)。

組織学的所見：肺炎巣部(写真1)は殆ど壊死組織で占められ、球状の微生物のほか随所に太目の、分岐のあい菌糸が粗あるいは密に認められる。菌糸は肺胞や気管枝内(B)のみならず血管内(G)にも存在し、血栓の形成を伴い、また菌糸を中心に多形核白血球やその核破片の集簇がある。一方、随所に見られる球状体は肺炎巣部に限らず全肺に亘って密在(写真2)している。この球状体と前述の菌糸の間には連続性はない。球状体の固定材料をラクトフェノール処理で得た標本および切片標本について検討したところ、おおよそ径350~420 μ

前後の球状をなし、約30~47 μ 前後の厚い壁とその内部にヘマトキシリンに顆粒状に染まる内容をもつ。この球状体の退行性変化はしばしば認められ、特に肺炎巣部において著明で、細胞質性内容の消失、不染、壁の膨化(写真1)、細片化などが認められる。また、宿主側の反応は一般に軽度で、単に周囲の肺組織を圧迫するだけに留まるものが多く、極く一部に軽い細胞性反応が認められるに過ぎない。変性・死滅したものに対しては巨細胞を含む組織球やリンパ球の出現もある。

以上の所見からこの肺に認められる病変は、一つは太目のあい分岐を示す菌糸をもつカビによる肺炎、他は宿主側の反応は極めて軽い球状の微生物によるもので、前者は恐らくケカビの一種、後者はその形態から *Emonsia* 属真菌(大きさから *E. crescens* とと思われる)であろう。*Emonsia* 属真菌の感染は恐らく捕獲以前と思われ、それが全肺に多数分布してはいるがその組織変化から致死的原因とは考えられず、肺、胸膜、心嚢に広がるカビ性の病変を死因と見るべきであろう。ちなみに他の3匹中1匹に *Emonsia* 属真菌感染が認められている。

組織学的診断：カビ性肺炎(恐らく *Mucormycosis*) + *Adiaspiromycosis* (または *Haplomycosis*)

写真説明 1. 標本A H-E $\times 100$

2. 標本B アザン $\times 8.5$

(関係記事7頁)